



タイトル 6度目の大絶滅

原題 THE SIXTH EXTINCTION

著者 エリザベス コルバート
Elizabeth Kolbert

訳者 かじばらたえこ
鍛原多恵子

出版社 NHK出版

発売日 2015年3月25日

ページ数 359頁

著者のエリザベス・コルバートは「ニューヨーク・タイムズ」紙記者を経て、1999年から「ザ・ニューヨーカー」誌のスタッフライターで、これまでに二度にわたって全米雑誌賞を受賞している。既刊の邦訳には「地球温暖化の現場から」などがある。

中米のパナマ共和国で、カエルが次々と姿を消した。熱帯や亜熱帯には色鮮やかなカエルが多く、なかでも「黄金のカエル」はその美しさでひととき目を引く。

著者がこうしたカエルの異変に気が付いたのは、児童雑誌の記事と学術誌の論文がきっかけだったという。論文は「われわれは六度目の大量絶滅のさなかにいるのか？」と題され、マウンテンキアシカエルが何匹も腹を上にして死んでいる写真を掲載していた。そこから著者の「絶滅」を追う旅が始まる。

自分が真に途方もない時代に生きているのだという感慨を持って読んでほしいと著者はいう。

さっそく目次を見てみよう。

プロローグ

第1章 パナマの黄金のカエル

第2章 マストドンの臼歯

第3章 最初にペンギンと呼ばれた鳥

| | |
|--------|------------|
| 第 4 章 | 古代海洋の覇者 |
| 第 5 章 | 人新世へようこそ |
| 第 6 章 | われらをめぐる海 |
| 第 7 章 | 海洋の酸性化 |
| 第 8 章 | アンデス山脈の樹林帯 |
| 第 9 章 | 乾燥地の島 |
| 第 10 章 | 新パンゲア大陸 |
| 第 11 章 | サイの超音波診断 |
| 第 12 章 | 狂気の遺伝子 |
| 第 13 章 | 羽をもつもの |
| | 訳者あとがき |
| | 参考文献 |

黄金のカエルから始まった著者の旅は、すでに絶滅したアメリカマストドン（表紙の写真）、オオウミガラス、アンモナイト、フデイシ、ネアンデルタール人、そして絶滅一步手前にいるスマトラサイ、サンゴ、ハワイガラスなどへと移って行く。

著者は、これら絶滅種の痕跡と絶滅危惧種の今を追って世界各地を訪れる。パナマ、フランス、アイスランド、グレートバリアリーフ、ペルー、ブラジル……。

厳寒の海に潜り、コウモリが冬眠する廃坑や洞窟に入り、夜のグレートバリアリーフで方向を見失う。調査はときに命懸けである。こうした調査の様子を伝える描写は生き生きと臨場感にあふれている。

それだけでも十分楽しいが、本書の真骨頂は、やはり生物の「絶滅」の昔と今を概観できることである。

生物界には過去5回の大絶滅(**Big Five**といわれている)があったという。32頁の**Big Five**の絶滅の図は縦軸が科数である。つまりこの図では科レベルの多様性が大きく減少したことを示している。しかし、ある科の1種でも生き残ればその科は生き残ったことになるので、種レベルでの損失はこれより遥かに大きいはずだ。

大量絶滅の定義は古生物学者によって少しずつ異なるが、生命の歴史の中で「長く退屈な時間がときおりパニックによって遮^{さえぎ}られる状況」という点ではほぼ一致している。

恐竜が絶滅した白亜紀末は巨大隕石の衝突による気候変動によるもので、これが史上5度目の大絶滅であった。その他の大絶滅は、オルドビス紀末の絶滅の場合は氷期、ペルム紀末の場合は地球温暖化と海水の酸性化などが原因であった。いずれも突然の大規模な自然災害で多くの種が消滅している。

そして今、私たちは6度目の大絶滅のさなかにあり、その犯人は人類に他ならないというのが本書の主張である。

私たち人間は、ここ数百年で多くの生物を絶滅させてきた。地理的隔離により増大した生物多様性は、いまグローバル化による病原体混入により失われつつある。固定された CO₂ は化石燃料として放出され、温暖化のみならず海水の酸化をまねいている。これらの要因が 6 度目の大絶滅を引き起こしており、私たち人類も絶滅危惧種なのだという。

陸上動物であるにもかかわらず、私たち新種は創意工夫に満ち、海もわたる。長さが 30cm の卵を産む鳥類、ブタくらいの小さなカバ、巨大なトカゲなど、独特の進化をとげた動物の暮らす島々にも足跡を残す。孤立した環境にいたこれらの動物は、新参者や彼らについてくる動物（たいていの場合にはネズミ）に対処する能力がない。そのため多くは姿を消す。

こうしたことを何千年、何万年と繰り返しながら、すでに新種とも言えなくなった私たちは地球の隅々にまで広がった。

6 度目の大絶滅は人類が出現した時点からすでに始まっていたことが最近になって解明されつつあり、私たちは地質学的に見て「人新世」にいるというのである。

「人新世」という言葉は、国際層位学委員会（ICS）はすでに「人新世」を現代の地質年代の名称とするか否かを正式に検討中で、そう遠くない未来、世界中の地質学の教科書が改訂されるかも知れないという。

アメリカ自然史博物館の生物多様性ホールには、その展示物は中心の銘板を取り囲んでいる。その銘板には、「現在、6 度目の大絶滅が進行中であり、今回の原因はひとえに人類が生態系の景観を変えたことにある」と記されている。

最終章「羽を持つもの」では、サンディエゴ動物園の希少種保全研究センターで著者は「ポオウリ」と呼ばれる最後の「ハワイミツスイ」という鳥の細胞の培養に成功したものをを見せてもらう。「現代のドードーね」と会話が交わされるが、ここは液体窒素で冷凍保存された生き物たちの細胞の「冷凍動物園」と呼ばれている。

生き物は、このような終わり方をしなければならないものだろうか。生き物たちの残された最後の望みは液体窒素の中だけなのだろうか。

生物圏が小さなプラスチック容器のみになってしまった未来を陰気に憂えているより、種の救済のために何ができるか、何が実際なされているかに注目した方が現実的で、倫理的ではないだろうか。しかし、絶滅を避ける対策について著者は語ろうとしない。

私たちが引き起こした絶滅によって、私たち自身はどうなるのだろうか。

考えられる一つ目の可能性は、私たちもいずれ自分たちが引き起こした「生態系の景観の変化」によって死に絶えるというものである。この考えは次のようにして導き出される。人類は進化の拘束から自由になったとはいえ、地球の生物学系と地球化学系には依存したままである。

したがって、これらの系を破壊すること、すなわち熱帯雨林を伐採し、大気組成を変え、

海を酸性化することによって、私たちは自身の存続をも危険にさらしている。

生態学者のポール・エーリックは次のように述べている。「ほかの種を絶滅に追い込むことにより、人類は自分がとまっている枝を切っている」と。

二つ目の可能性は、ヒトはその才知を發揮し、そもそもその才知が招いた惨事を回避するというものである。たとえば、地球温暖化があまりに大きな脅威になると、大気を調整してそれに対抗できると真剣に考える科学者がいる。また、硫酸塩を成層圏に散布して太陽光を宇宙にはじき返したり、太平洋上に水滴を噴射して雲をつくったりする。もし、こうした手段がいずれもうまくいかず、いよいよのっぴきならなくなっても、まだ大丈夫と主張する人々はある。別の惑星に移り住めばよいというわけだ。……。

しかし、一番大切なのは人間のみ存続ではない。この驚嘆すべき現在という瞬間に、私たちは、これから進化がたどる道、あるいは、たどらない道を全く自覚することなく選り取っている。そのような力を持った生物がかっていたためしはなく、残念なことに、それが人類のもっとも永続的な遺産となるだろう。

最終章は、エミリー・ディキンソンの詩「希望には羽がある」を踏まえていると著者はいう。人類はたしかに現在進行中の大絶滅の張本人ではあるけれども、一方で絶滅危惧種を救おうと奔走する人々はたくさんいる。本書にも、そういった人々がたくさん登場する。

著者は、そこにかすかな希望の光を見出している。

本書は大絶滅の話なので、悲壮感に満ちあふれた本かというところでもなく、読者は大絶滅の証拠を巡るツアーを楽しむうちに、人間も絶滅危惧種であることに気付かされる。つまり、他の種を絶滅に追い込むことにより、人類は自分がとまっている枝を切っていることに気付くのである。

さらに、人類も「冷凍動物園」入りかと考えるが、人類の生きた証拠をいれる小さなプラスチック容器を誰が用意するのも疑問である。さらに、人類がいない地球に「冷凍動物園」の存在価値があるのかどうか。

地球の過去・現在・未来の有り様を考える、あるいは意識することができる人類はもういないのである。人類の存在記録は、奇異な物質を含んだ薄い地層として残るに過ぎないのではないか？ しかも、そのことさえ意味を持たないのではないか？

人類の通る跡に残された絶滅種の山また山が克明に綴られている。そして、自らが含まれていることに多くの人が気付かないまま、もはや引き返すことのできない道を選んでいくのである。

アラスカ州のある保全グループの代表がこう語っている。「人には希望が必要です。かくいう私も希望を必要としています。それがなければ私たちは生きていけないのです」と。

2015.6.20